

2006年5月12日
 (財)日本水泳連盟
 水球委員会

水球競技レフェリー・ガイドラインに関する一部訂正の件

2006年5月2日に(財)日本水泳連盟ホームページに掲載した記載した水球レフェリー・ガイドラインに一部内容の誤りがありましたので、お詫びして訂正させていただきます。

記

1. 改訂部分(下線が改訂部分、訂正線が削除部分):

<p>両手を挙げる行為に対する判定の纏め (21.6 項、22.2 項(b)(c))</p>	<p>パスをブロックする/しようとした場合、<u>意図的に両手でプレーした/しようとした場合:</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 5m 外 ボールに触れたら単なるBoth Hands <u>両手でボールにプレーしようとした場合、 或いは意図的に両手でボールをプレーした場合は退水</u> ◆ 5m 内 <u>それが無ければ恐らく得点になると思われる場合はペナルティ・ファウル</u> 	<p>位置の基準は防御側プレイヤーの位置</p>
	<p>シュートをブロックする/しようとした場合:</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 5m 外 退水 ◆ 5m 内 <u>それが無ければ恐らく得点になると思われる場合はペナルティ・ファウル (シュートの場合は両手によるブロックが無ければ恐らく得点になると判断される為、シュートへの両手ブロックはペナルティ・ファウルを判定すべきである)</u> 	

2. レフェリー・ガイドライン(改訂後の全文):

ケース	正しい判定・判断	備考・基本的な考え方
<p>試合再開時に8人の選手がいた場合 (関連条項 22.6)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 再開前に正しい人数を確認するのがレフェリーの責任である為、正しい人数に戻してから試合を再開する。再開時に選手が潜っている場合等、已む無い場合もある為。 ◆ 但し、幾つか(通常は1往復以上)のプレーが続いた後に依然正常より多い人数がいた場合は監督の責任であり、レフェリーが行うべき再開時のチェックの範疇を超える為、ルールに則りペナルティ・ファウルを与える。この場合、誰が不正に多い競技者かが判らない為、チームへのペナルティ・ファウルが科され、個人へのパーソナル・ファウルは科されない。又、永久退水にもならない。 	<p>これ迄は一律にペナルティ・ファウルを判定すべきとしていた。</p>
<p>帽子の色と番号 (4.3 項)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 赤帽は1番と13番を用意する。 ◆ 白、青帽は2番から13番迄を用意する。GKが2人以上いる場合は13番の赤色の帽子を用意する。1番と 	<p>試合の進行を早くする事が目的であり、帽子の交換で時間を取らない様にするのが主旨。</p>

	<p>13 番以外は赤帽にしてはならない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ GK が 3 人以上いる場合は旧ルールと同様、即ち、3 人目の GK を入れる場合にはその時に出場している GK と 3 人目の GK が帽子を交換する。 	
<p>監督が立って指示を出す権限 (5.2 項)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 攻撃側チームの監督のみ試合中いつでも 5m 線迄出て選手へ指示を出す事が出来る。 ◆ 但し、レフェリーが近くにいる場合にはレフェリーから 2m 程度離れるべきである。 ◆ 監督がレッド・カードを受けて退場した場合、或いは試合の最初から監督がいなかった場合も含めて上記監督への権限はアシスタントコーチには適用されない。これに違反したベンチ役員に対してはレッド・カードを課す。 	<p>監督とアシスタントコーチの権限を明確に分けたもの。</p>
<p>ゴール・スローとコーナー・スローの判断 (16.1 項、17.1 項、20.16 項)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◆ シュートされたボールが防御側競技者にブロックされてサイドラインを割った場合でもゴール・スロー及びコーナー・スローの判定はボールがゴール・ラインを割った場合と同様の判断をする。 ◆ GK を除く防御側競技者が意図的にボールをそらしてボールがゴール・ラインから出た場合はコーナー・スロー、サイドラインから出た場合は攻撃側のフリー・スローとなる。 	<p>シュートをブロックした場合は「意図的」ではなく、シュートやパスのコースをそらせた場合には「意図的」と判断すべき。</p>
<p>両手を挙げる行為 (21.6 項、22.2 項(b)(c))</p>	<p>< FINA 説明 > 両手を挙げる行為に対する質問はかなり受けたが、実際にはこの反則は新ルールで行われた 400 試合の内、10 回程度しか起こっていない(2005 年 12 月現在)。従い、先ず「両手を挙げてはいけない」という点を徹底すべきである。</p> <p>< 質問 > センターポジションでセンターバックがノーファウルをアピールする為に両手を挙げている時にシュートが飛んできた場合はどうなるか？</p> <p>< 回答 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 先ず両手を挙げてノーファウルをアピールする必要はないという点を理解すべき。 ◆ 両手を挙げているのが何を目的としたものであるのかという状況をレフェリーが見極めて判定すべき。 	
<p>両手を挙げる行為に対する判定の纏め (21.6 項、22.2 項(b)(c))</p>	<p>パスをブロックする/しようとした場合、意図的に両手でプレーした/しようとした場合：</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 5m 外 両手でボールにプレーしようとした場合、或いは意図的に両手でボールをプレーした場合は退水 ◆ 5m 内 それが無ければ恐らく得点になると思われる場合はペナルティ・ファウル 	<p>位置の基準は防御側プレイヤーの位置</p>

	<p>シュートをブロックする/しようとした場合:</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 5m 外 退水 ◆ 5m 内 それが無ければ恐らく得点になると思われる場合はペナルティ・ファウル (シュートの場合は両手によるブロックが無ければ恐らく得点になると判断される為、シュートへの両手ブロックはペナルティ・ファウルを判定すべきである) 	
5m シュート及びフリー・スローへの妨害 (14.3 項(d), 21.5 項 21.6 項)	<ul style="list-style-type: none"> ◆ フリー・スローの位置から離れて片手を垂直に挙げるブロックはノーファウル ◆ 両手を挙げる行為や片手であっても相手にかぶっていく行為はフリー・スロー妨害と判定すべき。 	
5mシュートの適正度 (14.3 項(d))	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 一連の流れに沿ってシュートしているか否かをレフェリーが判断すべき。 ◆ 5m 線外でフリー・スローが与えられた後、5m 線内に入ってしまったボールを 5m 線外に戻す場合を除き、明らかにボールを移動させる、或いはボールを持ち替えるといった行為は一連の動作と見做されない。 	「直ちに」ではなく、「ルールに沿って = 一連の動作で」である点に留意すべき。
両者退水の場合の処置 (21.13 項)	<ul style="list-style-type: none"> ◆ レフェリーは一度ボールを取り上げて退水者の番号を明示してから、元々攻撃権を持っていたチームにボールを渡して試合を再開する。(これ迄はニュートラル・スローで試合を再開していた) ◆ 従って、両者退水後の 5m シュートは認められない。 ◆ この規定において退水した両チームの競技者は 21.3 項に規定される最も早く発生したケースに応じて、或いは次のボール保持権の移転時に再入水出来る。この規則のもとで退水させられた 2 名の競技者が各々の再入水エリアに到着する前に入水が可能になった場合、各々の競技者が入水の準備が出来次第、防御側レフェリーは入水の合図を出してよい。この場合、レフェリーは両名が共に準備出来るまで合図を出すのを待つ必要はない。 ◆ 両者退水となった場合にボールを保持していたチームはフリー・スロー、ゴール・スロー、コーナー・スロー、ペナルティ・スローにて試合を再開する。ニュートラル・スローが行われる前であった場合、レフェリーは 18 項に則って試合を再開する。 	両者退水の際に、レフェリーがボールを取り上げる事によって元々ボールを保持していたチームの 5m シュートの権利を剥奪するのは如何なものかとの議論もあるが、「その権利を行使したいのであれば両者退水になる行為等すべきでない」というのが基本理念。
ボールを保持しないチームによる不正入水 (21.15 項(1))	不正入水者が再退水させられ、ペナルティ・スローが相手側に与えられるが、この反則を犯した選手に対する追加のパーソナル・ファウルは 1 つだけとなる。	ボールがニュートラルである場合も、ボールを保持していない事となる。
ボールを保持しているチームによる不正入水 (21.15 項 (2))	不正入水者が再退水させられ、相手側にフリー・スローが与えられる。不正入水者には追加でもう 1 つのパーソナル・ファウルが付加される。	

<p>インターバル中、得点後、タイムアウト中の不行跡に対する処置 (21.10項)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◆ これ迄はその後防御側となるチームの選手に不行跡があった場合は、その選手を交代ありの永久退水にすると共に、防御側が6人で試合を再開していた。 ◆ 今後は防御側であっても、交代ありの永久退水を科した後、7人で試合を再開する。 ◆ 試合再開はインターバル中であればスイムアップから、得点後・タイムアウト中であればボールを保持しているチームのセンター・スローにより行われる。 	
<p>暴力行為 (ブルータリティ) (21.11 項)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◆ ブルータリティの際の4分間退水後の交代選手の入水時には再入水者の所属チームの旗に加えて黄色の旗を出して合図する。 ◆ 交代者はすぐに再入水ゾーンに行く必要はない。 ◆ インターバル中、試合再開前にブルータリティが発生した場合のペナルティ・スローのやり方については別途 FINA が作成したメモに準拠する。この場合ブルータリティが双方複数の選手に対して科された場合の判定は下記の通り。 両チーム同数の選手にブルータリティが判定された場合： 両チーム1本ずつのペナルティ・スローを行う。 両チームの選手がブルータリティ判定を受けたが、片方のチームがより多い人数へのブルータリティを判定された場合： この場合も両チーム1本ずつのペナルティ・スローを行う(ブルータリティを犯した人数差に対する処罰は4分間の退水人数で処しているという考え方) 	<p>バルセロナ世界選手権、アテネ五輪、モントリオール世界選手権でブルータリティと思われる行為があったにも拘らず、ブルータリティの判定が1つも無かった。ブルータリティを判定して1人足りなくなると試合が決まってしまうので、レフェリーがブルータリティ判定を躊躇するという点を改善した。</p>
<p>暴力行為(ブルータリティ)がインターバル中、タイムアウト中、試合再開前に為された場合の後のペナルティ・スロー、試合再開の方法 (21.11 項)</p>	<p>いずれのケースも一旦試合を再開する笛を吹いた後、試合を止めてペナルティ・スローを行う。尚：</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ インターバル中に両チームの選手により同時にブルータリティが為された場合： ピリオドを再開し、ボールの保持が決まった時点で試合を止め、ボールを保持したチームにペナルティ・スローをさせる。 最初のペナルティ・スローの得点の有無に拘らず再度試合を止め、もう一方のチームにペナルティ・スローをさせる。 そのペナルティ・スローの得点の有無に拘らず再度試合を止め、ピリオド再開時にボールを保持していたチームにセンターラインからフリー・スローを与えて試合を再開する。 ◆ 得点後、或いはタイムアウト中に両チームの選手により同時にブルータリティが為された場合： 再開後にボール保持権を持っていたチームに先ず 	

	ペナルティ・スローをさせる。 その後は上記、と同様。	
退水した GK の交代でゴールに入ったフィールドプレイヤーへの処置 (4.3 項、20.5 項、20.8 項)	GK の特権は与えられない。この選手が両手でボールをプレーする、しようとした場合はペナルティ・スローが与えられる。	
試合時間残り 1 分でのペナルティ・スロー判定への処置 (22.8 項)	<ul style="list-style-type: none"> ◆ レフェリーはボールを取り上げてペナルティ・スローを取得したチームの監督を見る。 ◆ 監督がペナルティ・スローを選択した場合は片手を開いて高く掲げ、30 秒のボール保持を選択した場合は胸の前で両腕をクロスするサインを出す。 ◆ 新たな 30 秒の攻撃権を選択した場合、レフェリーは最も近い攻撃側選手にボールを渡して試合を再開する。この場合、選手は自陣に戻る必要はない。 	ここ数年、試合の残り時間 1 分で不正なタイムアウト要求、不正入水を故意に行き相手へペナルティ・スローを打たせてそれが失敗した場合にボールを奪還する試みが多かったため、これを阻止する為の措置。
ベンチへのコントロール(イエロー・カードとレッド・カード)	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 大前提としてレフェリーはチームにとって最大の友好的理解者でなくてはならない。 ◆ フェリーの指示は言葉ではなく、シグナルとカードで示す事。 ◆ ベンチに対してはイエロー・カードを出す前に先ずシグナルでコントロールする事。 ◆ それでもベンチがレフェリーの指示に従わない場合には観客にも判る様にイエロー・カード、次にレッド・カードを出す事。 ◆ レッド・カードを受けたベンチ役員・選手はベンチから出し、チームに対して指示を出す事が出来ない場所に移動させる。これは最初から試合に出場出来ない場合も同様。ウォームアップにも帯同させない事。 ◆ レッド・カードを受けたベンチ役員・選手は通常次の 1 試合出場停止処分とする。但し、判定に従わない場合には協議の上、2-3 試合の出場停止もあり得る。 	
ペナルティ・ファウルの判定基準	<ul style="list-style-type: none"> ◆ ペナルティ・ファウルとなる条件 攻撃側競技者が GK に正対している事。 攻撃側競技者がプレーを続ける意思を明らかに示して居り、それに対して防御側が「その反則が無ければ恐らく得点となると思われる」様な反則を犯した場合。 ◆ 見逃してはならない点: 防御側競技者が一旦手を離してノーファウル状態にしているか否か? (これ迄はこうなっているのにペナルティ・ファウルが判定されているケースが多かった) 攻撃側競技者のシミュレーション行為・挑発行為 	これ迄は左記基準が必ずしも明確に運用されていなかったため、新ルールではゴール前でのエクスクルージョン・ファウル、ペナルティ・ファウルを減らしたいというのが FINA/TWPC の意図。

	<p>をしているか否か(していれば遅滞無くコントラ・ファウルを判定すべき) 攻撃側競技者がプレーを継続しようとしている場合には継続させる事。</p>	
ゴール前センターポジションでの判定基準	<ul style="list-style-type: none"> ◆ これ迄はセンターポジションにボールが入ればエクスクルージョンという状態が多かったが、センターポジションをもっと良く見るべき。 ◆ 攻撃側競技者によるシミュレーション行為、挑発行為、押さえ込み、ヘッドオフ、ハンドオフも多く、これらにはコントラ・ファウルを判定すべきである。 ◆ エクスクルージョンを吹くなどとは言わないが、何が起きているのかを正しく判断すべき。 ◆ これらによって 2-5m 間での判定ミスを防ぐべきである。 	<p>ゴール前センターポジションにボールが入ればエクスクルージョン・ファウルの有無に拘らず、極論すれば攻撃側競技者がボールを持っていても即退水という状況が散見された。こういった状況を改善したい。ルールが変わったのではない。</p>
セクレタリーのミスとレフェリーの判定ミスの相違	<ul style="list-style-type: none"> ◆ セクレタリーのミスであれば、ミスが発生した時点迄試合を戻してから再開する。 ◆ レフェリーによる判定ミスの場合は試合が次の展開に進んでいたらもう試合を戻す事はしない。但し、重大な判断ミス(判定ミスではない)に対して試合後に抗議があり、それが認められた場合にはデレゲートとも協議の上、時間を戻して再開する事も有り得る。 <例> 2005 年ユニバーシアードで最後の 1 分での不正入水に対してペナルティ・スローを判定するのを忘れ、後でレフェリーがミスを認めてやり直したケースがある。 	
天候要因によるレフェリーの判断	<p>帽子の色、エンド選択、ペナルティ・シュートアウトを行うエンドの選択等についてはレフェリーの判断により、両チームにフェアになる様に適宜臨機応変に判断すべきである。</p>	
水着・ユニフォームの基準	<ul style="list-style-type: none"> ◆ FINA は選手の水着は全て同色・同型でなければならず、ベンチ役員も同一のユニフォーム(ポロシャツ等襟のあるもの)と同一のズボンを着用すべしとしている。又、サンダルも禁止で、前部が閉まった靴を履くべしとしている。 ◆ 日本に於いても水球のイメージ向上の為、全ての大会でこれを励行して欲しい。 	

以上